

十月十七日のこと



坂元彦太郎

↑1↓

一九六四年十月十七日。この日は、フルシチョフ首相の失脚、中共の核爆発の実験などのニュースがもたらされ、英・総選挙の結果がわかる日であった。こうした歴史的な一日であったが、その日に私なりに経験し、考えたことである。――

朝、私は幼稚園長室で、関西のある大都市の幼稚園の先生の訪問を受けた。その来意は次のようであった。

――自分の園は、教育委員会から、三年間「単元展開における絵画製作ののぞましいあり方」について研究するように指定された。三年目の今日、研究物を仕上げようとしているが、疑問があるの
で、助言を願いたい――というのである。

幼児の保育において単元を展開していくのに、絵画や製作をやらせていくことになる、絵画や製作の本旨であるはずの創造性を延ばすという点から見ると、うまくいかないことがあるが、そのことをどう考えたらいいものだろうか。その場合、単元とか主題とかいつているものの考え方を変えねばならないのではなからうか。さらに、新幼稚園教育要領では、単元のことをどう考えているのであるうか――といった疑問なのである。

実は、はじめは私はその間の趣旨がどういうことか、はっきりのみこめなかったのであるが、その地方の実情をおききしているうちに、やっと問題の焦点がのみこめた。この地方では、ことに数年前には、いわゆる創造美術系統の考え方ややり方が、ゆきわたっていた。そのためもあって、絵画製作は、もっぱら創造性を延ばすこと

にのみ意義がある、という考えがしみこんでいた。一方、いわゆるカリキュラム・ブームの余波で、各園の「カリキュラム」といわれるものができ、各月ごとに、主題を一つずつおき、さらにその主題のもとに二つの単元をたてて、それぞれに、より具体的なねらいを属させる、といった表の形をとってきたのであった。たとえば、五月の全題「元気なこども」その下の単元に「えんそく」「強いからだ」といったふうであつて、どの月もちゃんといさいがそろつてみごとなものである。

私は、大體、次のように答えた。――

むろん、そのような「カリキュラム」をその園がもたれることにいろいろいいはない。また、一般的にいつて、絵画製作に関する活動が創造性を養うことを大事にするのも当然なことである。しかし、その主題や単元のそれぞれのことばとしての意味が、その月の活動のすべてを総括したり、それらからすべてののぞましい活動がひき出される、と解するようになる、それはいき過ぎである。また、絵画製作に関するものは何が何でも創造性だけをやしなえばいいのだ、となると偏狭過ぎることになるであろう。さらに、主題単元にもとづく活動ばかりをやっているときには、絵画製作につながる活動であろうと、その外の部面であろうと、単元のねらいなり材料なりに規制されるのは当然であろう。必ずしも百パーセント創造性

をつちかう方向にはいかない。造型的な活動も含みこむであろう。それは当然で、いたし方のないことである。

しかしながら、同時に、主題や単元に規制されながらも、やはり創造性が伸ばせるなら伸ばすように努力しなければならぬし、また、主題単元に直接には関係のない時点で、創造性を伸ばす造形的活動をじゅうぶんにと工夫されねばならないことが多いであろう。

しかし、主題や単元をどういうふうに解するかは人によつてまことに雑多であつて、どういうふうに具体的に考えるかは、めいめいちがつてもいいのではなからうか。新幼稚園教育要領では、さいごのページに、主題や単元のことが出るが、はっきりした主張を打ち出してはいない。そういうわくぐみをたてようとたてまいと、それは自由である。ただ、どんな主題や単元を立てたとしても、園の教育としてなすべきことをおとさないようにすることが大切である。それは主題単元のなかでもいいし、主題単元の外であつてもいい。ただ私見をいえば、元來、単元という経験の展開の拠点が考えられたはじめは、何か具体的なしんをもつた経験や活動の集まりをいつたのであつて、なるべくこの原初のとときの意味に近く使う方がしぜんではなからうか。ただ単に大きな究極的な目標でくくつただけで主題や単元による活動というのは、意味がうすいと思う。

といったお話をしたら、何かしらおちついたような面持ちで、帰っていかれた。その姿を見送りながら、私は疑問に思った。そのテーマを授けた当局者たちの意図がどこにあったのであろうか。主題、単元というようなことばかりにかかずらわって、絵画製作のようなそれぞれのぞましいねらいをおろそかにする傾向を是正しようとしてあろうか。逆に、あまりに自由奔放な造型活動に偏しているの、それに少しでもたがをはめようとしてであるか。——私は、どちらかだろうかと、考えてみるのであった。

〈2〉

また、そのことを考えつづけて、自分で結論に達しないうちに、いまひと組の来訪客を迎えた。私は、私の小学校長室にお通しした。

お客は、S氏夫妻であった。実は、私どもの小学校二年在籍のお子さんを一週間前になくされたばかりである。ご子は昨年の秋ごろから、歯肉に悪性の腫瘍ようがで、それが世にも珍らしい小児がんであり、身体各部に転移してついになくなったのである。死ぬまで意識がはっきりしていて、オリンピックの記念切手をたいへん喜んでいたという——夫妻はかわるがわるご子息の話をされた。私はいくばくばを知らなかった。ご夫妻は、こうしてごどもはな

くなったが、幼稚園二か年、小学校二か年間の生活はこの上もなくしあわせであったといって、深くお礼を申しあげたい、これだけでも生きがいがあったといわんばかりに静かに目を伏せられるのであった。そしてお礼にといって、一封のものを幼稚園と小学校とにそれぞれ差し出され、記念にと、入学当時の写真の四つ切りを伸ばしたものを置いて、立ち去っていかれた。写真の、愛くるしい顔を見つめながら、私は涙を押えることはできなかった。

——すると、そこにまた、新しいお客が見えた。今度は名前をかくすわけにはいかなないので、ほんのお名前をあげねばならないのであるが、オーストリア駐在の内田大使の奥さまであった。四年前に、令嬢の光子さんを連れてかの地に出発されるときお目にかかって以来のことである。しかし、光子さんが向こうの地で音楽で名をあげられたことなど、たえず学校との間に文通があったので、久しぶりだという気はしない。

光子さんは、四年前小学校の卒業の日近く両親といっしょにオーストリアにいった。私たちは、音楽の才能もあるし、ねがってもない機会であると、喜んでお送りした。そののち、ハウザーという有名な音楽の教授に師事して、その才能を愛されて大事にされ、すでにさまざまな演奏会などに出演していることが、日本の新聞や週刊雑誌にも大きく取りあげられるようになっていく。

夫人は、一枚のりっぱなエッチングをもってきて記念にと下さった。これは、ウィーンのムジーク、フェライレンザールで、ここで光子さんがデビューしたところだという。この音楽堂は、ウィーン・フィルハーモニー楽団の本拠である。たしか、今年の五月、ボスコフスキーその他の名手たちと共演で、シューマンのピアノ五重奏曲などを光子さんは演奏したはずである。日本の十五才の少女が、世界の名人たちとおめず臆せずに行ったこの演奏が絶讃を博して、一躍有名になってしまったのであった。

光子さんは、いま高校一年にあたる学校にも通っていて、ドイツ語の外に仏語、英語もやってい、その外の学科でもトップであるという。そして、すなおできさくで、みんなからかわいがられているようである。

さらに、夫人は一枚の写真を示された。夫人と光子さんとお姉さま三人のものであるが、光子さんの顔には、何か大きなことをしあげたときの明るさと放心とが見える。「演奏会のあとですわね」ときくと、モーツァルトが五才のときデビューした室で招かれてピアノ独奏をしたあとだとのことである。

このようなことは、みな、お茶の水の学園のおかげであると夫人はいわれるのである。演奏会にかたくなったりはせず、大統領や他の大使たちとも平気で話ができるようになってるのは、これもお茶

の水の教育のせいだ、といわれる。自分のことは自分でやり、いつでもすなおでどんな場合でもかたくなったりはしない。これは、幼稚園から小学校にかけての教育のおかげなのだそうである。

向こうの幼稚園は環境や設備はりっぱだが、日本の幼稚園の方がなかみはずっとすぐれている。のびのびとしているうちに、何かしまりをもっているのがこちらであるが、向こうは、のびのびはしているが、しまりがどこにもない、といわれる。この辺は、向こうの教育をすぐれたもののようにいう人たちとは、反対のお考えなのであるが、私は、さもあらん、と思いつながら、夫人とともに、オーストリアの空の下にいる光子さんの顔を、うれしく思いうかべているのであった。――

こうしていつの間やら、十月十七日土曜日の午前は過ぎてしまった。時局の深刻さ、あわただしさに比べて、何と対照的な半日であったことであろう。こういう私たちもいてもいいのだと思いつながら、この三つのさきやかなできことに何か共通なものがあるような気もするのであった。その日は、さらにオリンピック大会の日でもあった。そして、「幼児の教育」の原稿の依頼を受けた日でもあった。